

# 南方（ビルマ）

## 戦場に架ける橋

兵庫県 池野 康治郎

私は、昭和十七（一九四二）年五月二十八日に「中部第五十四部隊入隊せよ」という教育召集（白紙）令状を受領しました。この部隊は輜重兵第十連隊補充部隊です。三カ月の教育修了と同時に臨時召集に編入され、十一月出動が決定しました。一泊二日の外泊許可証を胸に我が家に帰り、「行先は不明だ。全員達者で暮して下さい」と両親・兄妹と別れ。姫路城北練兵場の北側の兵舎へ帰りました。半年間の教育で一人前の兵隊らしくなりました。申し遅れましたが、輜重兵でも自動車隊

でした。

そのうち、ビルマ派遣と決定し、昭和十七年十一月二十三日に宇品港を出航しました。もちろん隠密行動で、原隊出陣時も姫路駅頭でも見送り等は最小限の人たちだけでした。列車の汽笛も港を出航する時の船の汽笛もなぜか共に低く哀愁をおびていました。

昭和十八年の正月をシンガポールで迎えました。思いを但馬に走らせ、雪に埋まれた山里を眺めながら地酒でも一杯やっているだろう、と他愛も無く戦友と語り合いながら、裸で汗を拭いていました。我が家の雑煮は特別美味だったことなど思い出していました。大型輸送船が二隻・繋留していました。乗船命令にて乗り込んで驚いたことには、

自分達日本軍人五百人と連合軍捕虜約五千人が同乗船していました。行き先は「ビルマ」です。

当時マラッカ海峡は船舶の墓場と言われるほど軍艦・御用船・一般輸送船など多くの船が潜水艦や機雷で沈没していました。最も危険な海域の脱出の五日間は生きた心地なしでした。連合軍の捕虜も同様な気持ちだったと思います。明日の晩は「ビルマのラングーンだぞ」と話していました。

一月十五日の昼過ぎごろに我々の船団は敵機B24の空襲を受け、私の乗船が被弾しました。約十五分後に沈没しました。捕虜や日本軍兵士、もちろん船員さんにも多くの犠牲者が出ました。自分は幸せにも浮上していたら僚船に救助され、水漬く屍にならずに生命永らえました。一月十七日昼過ぎに、ようやくビルマのモールメンに上陸しました。任地はビルマのタンビザヤで、泰緬鉄道は「ウ号作戦」（インパール作戦）遂行のため「早期完遂すべし」と大本営からの至上命令があり、英軍はじめ連合軍の捕虜五万人並に現地労務者約十

五万人を以って、我が軍の鉄道第五連隊並に鉄道第九連隊を主軸に各種部隊を加えた約一万三千人が従事しての鉄道建設でした。

巷間には、連合軍の捕虜が主力になって建設したかのごとく、思われていますが、前述のごとく、現地住民並に担当部隊等が一生懸命に完遂した大事業でした。

昭和十七年七月五日、鉄道第九連隊がタイ側ノンプラドックより、鉄道第五連隊がビルマ側タンビザヤより、一斉に着工し、一年三カ月の超スピードで完成しました。機動力は一切なく、すべて人力・臂力ひりよくにて建設に立ち向かいました。千古斧入れず人跡未踏の大ジャングル。山越え・谷渡り（小川も大河）測量隊は象を使用し、その背中に乗って、要所、要所の大木に「赤色のペンキ」で印を付けて直進、その後を大勢の伐採隊がジャングルに分け入り、道幅概ね五メートルから六メートルぐらいを切り開いて進みました。太さ何メートルもあるチークやラワンの大木を、十人余りの

各班が斧と四人引の大鋸を使って競争して切り倒してきました。

伐採作業隊の後はスコップと鶴嘴つるはしの路盤工事隊の活動が始まります。労務者や捕虜をモッコを担ぐ者、石を敷く者、土を盛る者に分けその上を地盤固めで日本風の「よいとまけ」の歌にあるような、そして各々のお国の歌や掛声も加わり賑やかに作業を行っていきました。捕虜監視隊も銃を背負い大きな声を張り上げて「叱咤激励」していました。

その後に、近くの山から運ばれた砂利や碎石を規定の厚さに敷き、枕木が並べられました。レールはマレーやビルマの各地より運ばれたものでした。当初は地盤固めのためにトロッコ運行が行われ、その後に専門技師による精密調査で完了しました。

この時点で日本から輸送された「C 56型機関車」が出勤しました。ジャングルの中を「ポーツ・ポーツ」と汽笛の音がしますと、我々をはじめ全

労務者（含捕虜等）は非常に感激しました。絶大な努力と苦心惨澹の末に完成した「汽笛一声」は最高の歓喜をもたらしました。

四月より雨季に入り、連日の降雨に、時には集中豪雨もあり、沿線の至る所において被害が発生し、我々輸送隊は連日、悪戦苦闘で、特に食糧の輸送には困難を極めました。加えてこの季節には風土病、コレラ、赤痢、マラリヤ等の疫病が発生し、各地で多くの罹病、犠牲者が出ました。

八月から九月に入ると、雨季が明けて今度は連日カンカン照りが続きました。すると待っていたかのごとく英空軍が時間を定めて来襲し爆撃や機銃掃射をして行きました。その都度路線や橋梁に損害を受け、修復が大変でした。中には捕虜や労務者にも多くの犠牲者が出ました。

私は昭和十八年九月、マラリヤに罹病し、高熱のために約十日間全く記憶なしの状態でした。その間、モールメンの陸軍病院に転送され、意識が戻ったのは十一日目でした。衛生兵曰く「熱中症に

て死亡」もあるとか、自分は幸運にも助かったのです。約一カ月したころ、今度は「アmeerバ赤痢」に感染しました。伝染が激しいために即「隔離だ」と宣言され、病院から数百メートル離れた隔離病棟に入れられました。

有刺鉄線の鉄条網が二重、三重に包囲して完全隔離でした。毎日何十回も数え切れぬぐらい下痢をしました。薬品も満足になく、人の話では焚火の炭が下痢に効くと教えられ、暑い所なのに焚火をして、その炭を口いっぱい頬張り、真っ黒な口になって一生懸命に食べました。肉体は極限状態に達していました。この衰弱状態から思えば「後何日の生命か」「どこで死ぬのも同じだ」と隣の患者と脱走を計画しました。

空襲のドサクサに紛れて、裏山の奥にある仏教寺院へ逃げ込んで僧侶に片言のビルマ語で懇願しました。真意が通じたのか手招きをされて、中に招き入れられました。そして頭ぐらいの椰子の実を下され、「中の水を飲みなさい」と身振り手振り

で教えて下さいました。そして自分達の顔をジューツト見ながら「貴男は心美しい人だ。私が助けて上げます」と言います。その時点では既に二人共体内には赤痢菌が死滅し、偶然にも快方に向っていたのかも不明ですが、次の日も、また次の日もとお寺に参って僧侶に「椰子の水」を頂戴しました。

私は終生あの御坊の厚志は忘れません。体重も、半分ほどの三十キロぐらいになっていましたが、日増しに元気が戻って「自力歩行」が出来ました。

十月十七日、病床で鉄路の貫通も知らされました。そして天皇陛下からの「恩賜の煙草」を頂戴しました。正座して一服吸いました。体内の血液が逆流するような緊張の一瞬でした。感涙にむせぶ战友もいました。こうして毎日のように多量の弾薬や物資がインパールに向って送られました。昼間はジャングルで待機し、夜になると走り出しました。要所要所には鉄道連隊が駐屯していて鉄路の保線に勤めていました。空襲の後には必ずトロツ

コを走らせて線路の確保に当たっていました。

自分も病院や僧侶のお陰によって体力が回復し、「原隊復帰命令」で病院をあとにしました。泰緬鉄道建設作業は完了しましたが、中隊は同一箇所にて自動車輸送の任に当たっていました。

八月二十日ごろでした。「終戦だ」「天皇陛下の玉音放送があり。詔勅が下された」と方面軍より指示が有りました。これで俺の任務は終わったのだ、と一瞬表現不可能な心境になりました。

戦後に沢山の軍人が、この線を通って、日本へ帰って行ったことでしょう。そして「泰緬鉄道」の有り難さを実感して下さったことと思ひ、自分達の労苦を自画自賛しても良いだろうと思っていいます。

東京裁判で泰緬鉄道工事で、四十一万四千九百人のうち、四万人もの犠牲者が出たと知らされ驚きました。それにもなつて「戦犯者百数十人」と、私は脳天に鉄槌が下つた思いがします。

今現在、あの鉄道は、タイ側のマレー線の「ノ

ンプラドック駅」より分岐して西方百六十八キロ地点の「ナムトク駅」までタイ国鉄が運営しています。それから先の奥地とビルマ側は廃線となっています。この線の途中に「カンチャナブル」という大きな街があり、その西方を流れる「メクロン河」の鉄橋が映画「戦場に架ける橋」のモデルでした。

現在はその宣伝によって、すっかり観光名所となつていそうです。タイ政府観光庁発行の写真等が出版されています。またタイが「ビルマ産出の石油を経済発展に役立てるため、この鉄路に石油パイプラインの建設を計画しているそうです。

亡き戦友の靈魂、自分達の血と汗で開発した、あのジャングルが、平和のために役立っていると思つただけで感無量です。願わくば、今日の日本の繁栄の因をなした約百万の英靈のことを忘れ去ることなく、戦争の悲惨さを子々孫々まで伝えられれば幸いです。